のに何時間もかけ、そのあげく逃げられてしまう間の抜けたところもある。嗅覚が鋭く、はるか遠くから動物の死体のある場所を知ることができる。

雑食家のハイイログマにとって、人間のゴミ捨て場は、格好の餌場である。三百キロから四百キロの巨体をゆすってゴミをあさっているところを、よく銃で撃たれたりする。ハイイログマは求めて人間を襲うことはないが、追いつめられるとキバをむきだして手向う。

ハイイログマは総数が少ない上、開発によって生息地域が狭められてきた。適切な保護措置をとらないと、絶滅の危険もある。

オオツノヒツジ Mountain Sheep

（大西時夫氏撮影）

太く螺旋状に曲がったツノ（おす）がひときわ目を引くオオツノヒツジは、別名ロッキー・マウンテン・シープといわれるように、主としてロッキー山脈の岩場に近い地域に住む野生のヒツジである。アラスカからユーコン準州にかけて分布するドールシープや米カリフォルニア州デスバレーに住むデザート・ビッグホーンはその仲間。

夏は山地のひらけたところに住み、外敵に追跡されると近くの岩場に逃げる。きわめて敏捷で、やはり山岳地帯に住むシロイワヤギと同じように、急な勾配でも駆け登っていく。冬は食糧（主に草木類）を求めて、低地に移動する。

十九世紀初めには、北米全体で百万頭はいたと思われるが、家畜用羊がもたらしたさまざまな病気や牧畜による生息地の縮少、狩猟などによって、現在では約二万五千頭に減った。しかし、近年は国立公園や禁猟区で保護された結果、その数は少しづつ増えつつある。

ハヤブサ Peregrine Falcon

鳥類の中では最も飛ぶのが速い（時速二百九十キロで急降下する）といわれ、三千年も昔からタカ狩りに用いられてきたハヤブサ。長く、とがった翼、鋭い目、先が鉤状に曲がって中ほどに歯のような突起のあるくちばし、強力なツメ――食肉鳥として面目躍如たるものがハヤブサにはある。

ハヤブサはほとんど世界中で見られる。カナダでは、三亜種がそれぞれブリティッシュ・コロンビア州沿岸（ほとんどが留鳥）、北米大陸の北極を除くその他の地域（北方では主として渡り鳥）、そして北極圏（渡り鳥）に生息している。

北米の大部分では法的に保護されているが、食物連鎖の最後に位置しているた

絶滅寸前から甦ったアメリカシロヅル Whooping Crane

つやのある真白い体。長い首。長くて薄黒く、とがった口ばし。細長くて黒い脚。一メートル五十センチもある堂々とした背たけ。そして全長二メートル近くも広がる羽をゆっくりと力強く動かし、頭をぐっと伸ばして槍のように飛ぶその優雅な姿――。米国テキサスで冬を越し、毎春、北米大陸を一直線に北上して、カナダ北西準州のウッド・バッファロー国立公園にたどり着き、巣作りをしてヒナを育てたあと、秋にまたテキサスへ戻っていくアメリカシロヅルは、最も美しい鳥のひとつである。

もともとそれほど多くなかったアメリカシロヅルであるが（一八五〇年でも北米大陸全体で千五百羽しかいなかったと推定されている）、その美しさゆえにハンターに狙われ、その数はだんだん減っていった。北米大陸の開拓が進むにつれ、アメリカシロヅルが越冬したり、巣ごもりする場所が急速に少なくなったのも大きな原因である。一九一八年には保護鳥に指定されたが、その数は減り続け、一九四一年にはわずか十五羽となり、二、三年後には絶滅するだろうといわれた。

自然愛好家や生物学者が保護を訴えた結果、一九五六年には二十七羽に増えた。しかし、これだけでは絶滅の不安は去らない。

そこで一九六七年、カナダ野生生物管理局と米国漁業・野生生物局は、ウッド・バッファロー国立公園で探し出した卵を人工的に孵化させて、人の手で個体数を増やすことにした。その結果、一九七一年には捕獲、保護されているアメリカシロヅルは五十九羽に達した。

しかし人間に保護されたアメリカシロヅルは、卵を生まなかった。そこで新たに二つの案が考え出された。ひとつは人工受精である。七八年には、この方法で一羽が十個、もう一羽が九個の卵を生んだ。もうひとつは、国立公園でとってきたアメリカシロヅルの卵を、比較的に数の多いカナダヅルに抱かせて孵化させる方法で、これも大体うまくいった。

撮影Lorne Scott

こうして、アメリカシロヅルはおよそ百二十羽に増えた。まだまだ安心はできないが、今後はもっと多くのアメリカシロヅルがあの美しい姿を見せてくれるだろう。